

清末、中国人日本留学生の近代国民意識形成に関する一考察 —1896年から1901年までの留学生界に着目して

(岡山大学大学院博士課程) 孫 瑛鞠

[要旨]

これまでの中国近代政治史に関する研究では、政党や一部の組織及び、少数のエリートの果たした指導的役割に主眼が置かれてきたが、本稿では、1901年までの中国人日本留学生界に焦点をあて、清末の変革・革命運動の思想的基盤となった近代国民意識の覚醒の過程の一端を解明したい。すなわち、従来の一部の組織や大物重視の歴史叙述に対し、来日留学生たちの啓蒙活動によってもたらされた近代ナショナリズムの誕生、発展の重要性を指摘する。

I. はじめに

これまでの中国政治史に関する研究では、政党や一部の組織及び、少数のエリートの果たした指導的役割が重視されてきたが、それを支える思想的基盤となった近代国民意識の覚醒の具体的な様相については、必ずしも明らかにされてこなかった⁽¹⁾。戊戌変法から辛亥革命にかけての時期は、東西文化の激しい衝突の時代であったとともに、中国の社会意識の大変動の時代でもあった。当時先頭に立ったものたちは封建的意識から解放され、近代国民意識に注目するようになり、メディアや教育を通じて、それを清末の中国に普及させ、その後の変革運動ないし革命運動の思想的基盤を築いたのであった⁽²⁾。

本稿では、近代日中の接合点と見なされる清末の中国人日本留学生界を考察の対象とし、彼らの国民意識の形成過程を明らかにすることを課題とする。中国人日本留学生の爱国思想及び国家・国民論についてはこれまで多くの研究によって言及されているが⁽³⁾、具体的にどのような思想的契機によって明確な国民意識が彼らの間に生じたかについては、必ずしも明らかにされてこなかった。そこで本稿では、1901年までの中国人日本留学生

界に焦点を絞り、当時の留学生たちの思想と行動に大きな影響を与えた梁启超ら維新派が提唱した「任侠」救国思想から、留学生界の先頭に立ったものたちが参加した勤王蜂起前後の思想的变化までを中心に、時系列的に史実を追うことで、彼らの中に国民意識が形成されるに至った思想的变化を跡づけたい。こうした作業を通じて、清末中国における国民意識の形成過程の実像に迫りたい。

II. 1900年前後の留学生界と「任侠」の崇拜

1. 1900年前後の留学生界

日清戦争における中国の敗北は、列強の中国分割の動きを加速させ、知識人たちに未曾有の危機感を与えた。そして、康有為を中心とする維新派が歴史の舞台に登場し、変法自強運動が展開された。彼らの改革の手本となったのは、一足早く近代化を達成した日本であった。そのため日本留学への機運が醸成された。戊戌政変後も日本への留学政策は継続され、中国から数多くの留学生が日本へと渡った。

中国人的日本留学は、1896年に清政府が13人の学生を日本に派遣したことにより始まった。その後、留学生の人数は年々増加し、1901年には280

(2)

人となり、日露戦争前後には一挙に8000人に達し、1906年には1万人を超えるほどであった⁽⁴⁾。1901年までの留学生数は、その後の数と比べてみれば極めて僅かなものである。しかし、彼らが発揮したエネルギーは、数の上での少なさを補って余りあるものがあり、留学生雑誌の創刊や革命運動の推進などにおいて牽引車の役割を果たした。こうした留学生の言論は梁啓超が創刊した『清議報』に始まり、また留学生の手による雑誌は1900年末から創刊されたが、これまでの研究は1901年以前のこれら雑誌の言論にまで目が届いていないのが実情である。しかし、これら言論の解明こそがその後の留学生の関心や思想的変化を跡づけるために欠かすことができないものと考えられる。表は、1901年までに中国人の手によって日本で発行された刊行物についてまとめたものである。

まず、当時の中国人日本留学生界がどのような状況だったのかを、1902年10月に清国留学生会館によって刊行された『清国留学生会館第一次報告』を参照して見ていきたい。清国留学生会館は1902年3月30日に東京の神田駿河台に創設され⁽⁶⁾、中国人留学生の「中央本部であり、俱楽部であり、講習会場であり、出版本部」⁽⁷⁾であった。つまり、中国人留学生たちの生活支援、情報交換などを行う、当時の中国人留学生の勉学、生活及び活動の

重要な拠点であった。この資料によると、1900年前後の留学生の様子は以下のように記されている。

(留学生) 会館はどのようにして起つたか。それは留学生の団結力の発展によって起つたのである。今その発展の足跡を遡ってみると、概ね庚子（1900年）以前の時代と庚子以後の時代……に分けられる。庚子以前はどのような時代であったか。留学生の主な修業予備校は、日華学堂、成城学校、亦樂書院であったが、そのほかの場所にも多く分散していた。要するに、留学生たちはみな互いに住所や名前を知らなかった。その時、「熱心家」がいて、皆が集まる方法を考えようとしたが、それに応じるものは明け方の星のように少なかった。これは我が留学生界の「太古の時代」と言えよう。知力・胆力の未熟さはその程度であった。庚子以後の時代はどうであったか。切磋琢磨の心がますます研ぎ澄まされ……その転換の鍵となったのは、庚子六、七月の間であろう。その時はちょうど北方に拳匪（義和團）の乱が起こり、都市が攻め落とされ、その危機的状況はすばやく海外に伝えられた。毎日決まってビラを売り歩くものがおり、

表 1901年までに中国人によって日本で発行された刊行物⁽⁵⁾

刊行物名	主要編輯者	発行所	発行期間	備考
清議報	梁啓超	横浜・清議報館	1898.12.23-1901.12.21 全100号	旬刊。戊戌政変後における維新派の主要な機関誌。主要な欄は、論説、時論、学説、中国近事、政治小説。
訳書彙編	戢翼翬、楊廷棟、楊蔭杭、雷奮	東京・訳書彙編社	1900.12.6創刊、1903.4『政法學報』に改名。停刊期間は未詳。現存1-21号、『政法學報』1-8号。	月刊。日本留学生が創刊した最初の雑誌。政治を強国の本源と見なし、1-8号は主に西洋の哲学、社会科学関連著作の翻訳、9号から主に政法学関連著作の翻訳を掲載。
開智録	鄭貫一、馮自由、馮斯夔	横浜・清議報館	1900.12.21-停刊時間未詳 現存1-6号	旬刊。留学生組織である開智会の機関誌。主要な欄は、論説、訳書、雑説、時評、偉人小説。
國民報	秦力山、戢翼翬、沈翔雲、馮自由	東京・國民報社	1901.5.10-1901.8.10 全4号	月刊。留学生が創刊した最初の革命雑誌とされる。主要な欄は、社説、叢談、時評、記事、西洋論説。

手に鈴を持って鳴らし、声の張り上げ方は痛ましいほどであった。それは一日に何度も、多いときには深夜にも及び、街中に絶えなかつた。その時海外にいたものたちは郷里への思いをこらえ難く、その乱に驚きと共に動転した。以前は四方八方に分かれて付き合いのなかつたものたちもここに至つてみな互いに急を知らせ合うようになり、その一種の愛國の精神は、虹を貫き月日を耀かすほどで、私は居ても立つてもいられず、故人と夢枕で会いたくなるほどであった。この後の（留学生界）の勢いは、その時のおかげに他ならないのではないか。それゆえ、特に庚子六、七月の間の時代について明記するのである。これより以前は会とはどのようなものか知らなかつたが、今は懇親会、同窓会、校友会が次から次に續くようになり、以前の会は十畳の部屋でもなお空席が多かつたが、今は四百余畳の部屋でも立錐の余地がないほどである。以前の若者はためらつて前に進もうとしなかつたが、今は深窓の令嬢でも相次いでやって来るようになり、以前は一つの雑誌を作ろうとしても原稿が集まらなかつたが、今や印刷物は車に乗せて大きなまで量らなければならぬほど多い。文明が次第に開け、智慧が徐々に増すことを、どうして我らが前途のために祝福しないでいられようか⁽⁸⁾。（括弧と傍点は筆者による、以下同様）

以上の記述からすると、中国人留学生界には1900年前後に大きな変化があったことがわかる。つまり、1900年以前の留学生界はまとまりのない状態で、みな互いのことや国のことなどに关心を持たなかつた。いわゆる留学生界の「太古の時期」である。それに対し、1900年以後の留学生界は打つて変わって団結するようになり、集会や雑誌の創刊などの活動が盛んになつた。その重要な節目と

なつたのが「庚子六、七月の間」（西暦の1900年6月末頃から8月末頃まで）ということである。この時期はちょうど義和団の乱が最高潮に達した時期である。この引用から、義和団の乱によってもたらされた空前の亡国の危機が留学生に重大な影響を与えたことがわかる。つまり、義和団の乱は留学生が国への関心を高める大きな契機となつたのだった⁽⁹⁾。

さらに、ここで留意すべきは、上文中の「故人と夢枕で会いたくなるほどであった」という一節である。「故人」とは一体誰を指すのか。それは、この時期、義和団の乱とほぼ同時に起こつた康有為・梁啓超ら保皇派（1899年7月以後の維新派の呼称。以下は維新派と呼ぶ）によって起こされた勤王蜂起の犠牲者だと思われる。この勤王蜂起には当時の留学生たちが直接に関わっていた。引用文中に示されている通り、1900年以前の留学生界はまとまりがない状態であり、その中に少数の「熱心家」がいて、皆が集まる方法を考えようとしていたというが、それは恐らく中国人日本留学生界における最初の団体であった励志会を指すと思われる。励志会は1900年に創設され、戢翼翬、沈翔雲らがその発起人であった。励志会中の「激烈派」と言られた秦力山、呉祿貞、黎科、傅慈祥、蔡丞煜ら、及び戊戌政変後に梁啓超を追つて来日した湖南時務学堂の学生蔡鍔、范源濂、林圭、李炳寰、田邦璉ら十余人が勤王蜂起に参加した⁽¹⁰⁾。すなわち、これらの留学生は当時バラバラであった留学生界の先頭に立つて励志会を結成し、また勤王蜂起に参加し、最後はほとんどのものが命を失つたのである。幸い難を免れた戢翼翬、秦力山、沈翔雲、蔡鍔らは再び日本に戻り、留学生雑誌の創刊やその後の中国での革命運動において中核的な役割を果たすことになった。

このように、当時留学生界の先頭に立つていた留学生たちは勤王蜂起に参加し、彼らの思想と行動には梁啓超ら維新派による影響が大きかったこ

とが窺える。それでは、留学生たちは具体的に梁啓超ら維新派からどのような影響を受けたのか。以下、節をあらためて見ることとしたい。

2. 梁啓超ら維新派からの「任俠」救国思想受容

日清戦争後、光緒帝のもとで、若い士大夫層である康有為・梁啓超らを中心とした維新派による変法自強運動が進められた。当時彼らを含む知識人層の顕著な特徴の一つに、「任俠」に対する関心の高まりがあった¹¹⁾。中国の知識人は長い間、中華意識に阻まれ、往々にして国外のことには無関心であった。日本に対しても日清戦争までは積極的に研究しようとはせず、日本に関する知識は明代を大きく上回ることはなかった。その結果、日本についての知識を系統的に有している人物は非常に限られた。明治維新による変革が起こった直後の1870年、柳原前光らの使節団が渡清した時に、清朝の官僚の多くは初めて明治維新のことを知ったが、その後もしばらくは無関心が続いたのである。

日清戦争における中国の敗北は、清朝の朝野を驚かせるとともに、明治維新を通じて急速に強国となった日本への関心を高めさせた。しかし、明治維新に関する知識の蓄積は極めて不十分で、日本語が堪能な人材も極めて稀であった。こうした中、日本に関する重要な情報源となつたのが、黄遵憲の著した『日本国志』であった。1877年、黄遵憲は初代駐日公使何如璋の參贊官として日本へ渡り、4年間滞在した経験をもとにこの本を執筆した。原稿は1887年に脱稿していたが、すぐには刊行できず、写本が当時の中国の官僚をはじめ、知識人の間で読まれ、日清戦争後ようやく刊行された。その内容は、日本の政治、歴史、法律、風習等に関する多方面にわたる紹介と研究であり、当時中国の日本研究としてはレベルが最も高く、最も影響力のある著作であった¹²⁾。では、黄遵憲は日本の明治維新を成功させた要因をどのように

捉えていたのであろうか。それは少数の幕末の志士が勢いに乗って、徳川幕府の政権を転覆させ、王政復古を達成し、国家維新を成功させたというものであった。つまり、黄遵憲は明治維新の成功は幕末の志士に負うところが大きいと強調したのである¹³⁾。

日本に一度も遊歴したことのない中国の知識人にとっても、黄遵憲の認識は受け入れやすいものであった。というのも、中国では古くから「任俠」の歴史があったからである。「任俠」は春秋時代に生まれたと言われ、然諾、恩情を重んじ、生と死を軽んじ、人を窮境から救い出すという性格を持ち、時には王朝を転覆させる力となつた¹⁴⁾。このような「任俠」の性格は「義」「至誠」の心及び「強靭な胆力」を持ち、目標を達成するためには、犠牲となることも厭わない日本の幕末の志士たちと重なるところが多かったため、知識人たちが日本の幕末の志士たちを中国の「任俠」に当てはめたとしても不思議ではない。実際、当時の多くの人々は、中国の変革は日本のような「任俠」の人が少数いれば実現できると考えていた。この認識を広めたのは、ほかでもなく康有為を中心とする維新派であった。例えば、1897年3月に、梁啓超は上海の『時務報』に「日本国志後序」を発表し、「黄君が謙遜して、この本を脱稿して十年ほど世に出さず、中国人に日本のことを見せなかつたことについては、黄君を責めなければならない」¹⁵⁾と述べ、黄の『日本国志』を高く評価していた。一方、康有為がマカオで創刊した『知新報』(1897年2月 - 1901年1月)や、唐才常、楊毓麟らが湖南で主筆を担当した『湘學報』(1897年4月 - 1898年8月)、及び唐才常、譚嗣同らが湖南で創刊した『湘報』(1898年3月 - 1898年10月)は、「任俠」救国思想を広める最前線に立ち、知識人の間に大きな反響を呼んだ¹⁶⁾。

それらの雑誌の創刊とともに、湖南の維新派たちは時務学堂や南学会の創設などにも力を注い

だ。時務学堂は1897年9月に創設された¹⁷。「湖南開辦時務学堂大概章程」によると、「学生が学ぶものは中西いずれをも重んじ、西文は易しいものから難しいものへと進み、決まりに従って習う。中文は中文総教習（教習は清末教員の呼称、総教習は学部長にあたる）が定めた課程に照らす」¹⁸と規定されている。ここから、時務学堂では、中文総教習が教育内容の決定権を持っていたことがわかる。1897年10月に上海を離れてこの時務学堂の中文総教習に着任したのは梁啓超であり、彼は「時務学堂功課詳細章程」を作成し、学生の1年間の学習スケジュールを決め、『公羊伝』、『孟子』などの經典・史書を必読書として学生に読ませたほか、『万国史記』、『泰西新史攬要』、『日本国志』など外国を紹介する本や『時務報』、『知新報』、『湘報』などの雑誌も幅広く読むことを要求した¹⁹。彼と一緒にやって来たのは分教習（副教習）の韓文粧と葉覺邁であり、二人とも康有為の弟子であった。1898年春、梁啓超は病気で長沙を去り、後任に歐榦甲と唐才常を推薦した。彼らも梁の教授法を引き続いた²⁰。

また授業以外に最も重視されたのは学生に箇記（読書ノート）を書かせることであり、教習がそれに批評を加え、箇記を返却する際に教習と学生が対座して語り合った²¹。梁啓超ら教習は学生の箇記への批評にもっぱら民権、平等、任俠を記し、時務学堂でその影響を受けた学生たちは「あたかもある種の新しい信仰を得たかのように、自分自身がそれを享受するだけでなく、外に向かって宣伝しよう」と思うようになり、正月の休暇で帰省した際、学堂で学んだことを宣伝した。これらは湖南守旧派から「将来学堂の学生たちはみな梁啓超の説を以て人を教え、天下蒼生に害を及ぼす」と大きな批判が巻き起こった。特に「任俠」に関して、守旧派は梁啓超が学生の箇記に付した「日本のよく自強せし所以は、最初一、二人の藩士が慷慨激昂し、義憤を以て天下に号召し、天下がこ

れに呼応したからだ。これはすべて任俠の力である。中国にはそのような人物がいない」という批評に対し、「梁啓超は任俠を尊ぶために、日本の自強を口実にした」²²と批判している。これらのことから、梁啓超ら中文教習は、学生に「任俠」救国思想を教え、学生に深い影響を与えていたことが窺える。

このほか、時務学堂の学生であった蔡鍔が梁啓超に提出した箇記には、曹沫のような人を「心俠」とあるとし²³、孟子のような人を「氣俠」であるとし²⁴、当時の中国においては、「心俠」と「氣俠」の人がいないため、外国に狙われて虐められた、と述べている。梁啓超はそれに対し、蔡鍔が早く「心俠」、「氣俠」のような「任俠」となり、國家の重責を担う人材となることを期待すると述べた²⁵。蔡鍔はまた『湘報』に発表した「後漢書党錮伝書後」において、もし国のために心を失わず、勇気を失わなければ、中国にビスマルク、ティエール、薩摩長州のような俠が現れる、と述べている²⁶。また、蔡の同級生であった黃頌鑾は、『湘報』に発表した「讀史記遊俠伝書後」において、中国は昔から「任俠」を束縛し重視しないため、国が弱くなったと訴え、「任俠」は様々な特質を持っているが、一番重要なのは「俠心」である、と述べている²⁷。ここから、蔡鍔、黃頌鑾ら時務学堂の学生が、国の発展に大きな役割を果たした人物を「任俠」と見なしていたことがわかる。

このように、変法自強運動が進められる中、1898年9月、西太后を中心とする守旧派が政変を起こして戊戌変法は失敗に終わり、時務学堂は解散させられた。梁啓超は日本に亡命し、その後まもなく旬刊誌『清議報』を創刊し、その主筆を担当した。翌年、時務学堂の学生であった蔡鍔、范源濂、唐才質、林圭、李炳寰、田邦璿、蔡鐘浩ら十数名が相次いで渡日した²⁸。梁は民家を借り、彼らと寝食をともにして心を通わせた。唐才常もしばしば往来した。1899年8月、梁は横浜の華僑・

鄭席儒らの資金援助を得て東京高等大同学校（東京大同学校ともいう）を創設し、自ら校長を務め、来日した元時務学堂の学生と横浜大同学校（1898年創立）の学生馮自由、鄭貫一、馮斯欽ら合わせて30余人を入学させた。学校の教材は『民約論』、『フランス大革命史』、『ワシントン伝』、『英國革命史』などであり、蔡鍔、范源濂、秦力山、唐才常らはそれぞれワシントン、ルソー、クロムウェル、ウォルテールらに自らを擬した²⁹。戢翼翬、沈翔雲は毎回大同学校へ友人を訪ねに行った時、たいていは去り難く翌朝まで泊まったという。このほか、北洋官費生である黎科、蔡丞煜、傅良弼らも梁啓超とよく交流したという³⁰。ここから、東京大同学校の学生はみな国家の発展に大きな役割を果たした群雄、すなわち「任俠」になるという志を立てていたこと、また彼らと沈翔雲ら校外の学生たちとの交流があったことが窺える。これは後に留学生たちが「任俠」救国思想の実践、つまり勤王蜂起に参加する思想的基礎になったと考えられる。

III. 勤王蜂起に見る留学生の「任俠」救国思想の実践と挫折³¹

1899年夏、日本から戻った唐才常は沈翬らと上海で正氣会（のちに自立会と改称）を創設し総司令を自任した。7月1日、上海張園で維新派が集まり、「中国国会」が開かれた。容閎を会長、嚴復を副会長、唐才常を総幹事に選び、密かに蜂起の準備を進めた。参加者は汪康年、章炳麟、畢永年など80人余りであった。その後、康有為を中心とする保皇会の支持を得て、活動当地の民間組織である哥老会と連合し、その規模を拡大させた。勤王蜂起の目標は下からの武力行動を通じて、失権した光緒帝を復帰させ、立憲君主制を中国で実現することであった。当時、康有為はシンガポールですべてを仕切っており、梁啓超はホノルルで資金調達を担当し、あわせて計画や連絡も受け

もっていた。唐才常は実際の蜂起計画を指揮していた。ほかに、保皇会は中国の兩粵（広東、広西）、東南アジア、アメリカ大陸などで活動していた。

東京大同学校の十数名の学生、及び傅良弼、黎科、蔡丞煜、鄭葆丞、戢翼翬、沈翔雲、呉祿貞ら官費留学生は帰国して蜂起に参加した。戊戌変法の時期に各省で学会、学堂が作られたが、蜂起に参加したものたちのほとんどはそれら学会のメンバーや学堂の学生であり、その中でも元南学会のメンバーと元時務学堂の学生が最も多かった³²。

彼らによって組織された自立軍は7軍、2万人からなっていた。具体的には、安徽省の大通が前陣で秦力山、呉祿貞が統率した。安徽省の安慶が後陣で田邦璽が統率した。湖南省の常德が左陣で陳猶竜が統率した。湖北の新堤が右陣で沈翬が統率した。湖北の漢口が中陣で林圭、傅慈祥が統率した。また、漢口で総会親軍と先鋒軍が設置され唐才常が統率した。黎科、戢翼翬、李炳寰、蔡丞煜、鄭葆丞らは自立軍の規律を定め、自立軍の編制や将来の兵事などを計画した³³。このように、日本から帰国した留学生たちは蜂起の計画、自立軍の統率まで任されたことがわかる。当初は漢口・漢陽・安徽省・江西省・湖南省で同時に蜂起するという計画が立てられたが、資金難のために延期され、秦力山、呉祿貞は大通で蜂起を起こしたが失敗した。その後、彼らの動きは張之洞に知られ、8月20日に唐才常らの組織者20余人は漢口で逮捕されて勤王蜂起は鎮圧されてしまった。結局、参加した留学生のほとんどは命を失い、難を免れた戢翼翬、沈翔雲、呉祿貞、秦力山、蔡鍔、范源濂らは再び日本に戻ることとなった。

従来の研究では、勤王蜂起は中国の変法自強運動史上のピークをなすもので、その失敗を契機として秦力山、呉祿貞、沈翔雲らの同情を失わせ、彼らを一層革命派に近づけただけでなく、さらには清朝打倒を目指した中国革命同盟会の結成、ひいては辛亥革命に至るまで影響を与えたとされ

る³⁴。そこに異を立てるものではないが、勤王蜂起が中国知識人界にもたらしたいまひとつの思想上の大きな変化も無視できないであろう。すなわち、蜂起に参加したものはみな自らを「任俠」に擬し、彼らと同じような「任俠」が少数いれば、国家を変えることができると考えていた。言い換えれば、彼らは中国の変革が少数者によって実現できると認識していたのである。前述したように、中国の春秋時代に「任俠」思想が生まれた時には王朝を転覆させる力となつたため、梁啓超ら維新派を含む当時の多くの知識人は、その思想を天下を変化させる重要な手段と見なし、日本の明治維新の成功はまさにその証だと考えていた。しかし、このような認識は、あくまでも少数のエリートの役割を過大視し、民衆の役割をおろそかにする一種の封建的思想である。結局、留学生たちは勤王蜂起の失敗によって、梁啓超が後に「当時、私たちは毎日のように手ぐすね引いて革命をやろうとしたものだ……憐れなのは、徒手空拳の文弱の書生が失敗しないはずはなかった」³⁵と述べたように、少数の「任俠」だけに頼って中国を変えようとするやり方では成功できないことを悟ったのだった。勤王蜂起後、再び日本に戻った留学生たち、及び中国の知識人界の視線は、少数の「任俠」から中国全土の国民へと向かい始めたのである。

IV. 勤王蜂起後における留学生の国民意識の形成とその特質

1. 『清議報』に見る留学生の言論

勤王蜂起が失敗した後、再び日本に戻った蔡鍔、秦力山らは『清議報』にいくつかの文章を発表した。蔡鍔は「雜感十首」を、秦力山は「漢變烈士事略」、「吊漢難死友」などを発表し、そこから犠牲となった師友に対する悲しみ、清政府の腐敗に対する憤りを窺うことができる。このほかに、勤王蜂起で犠牲となった唐才常らを偲ぶ文章も多く掲載された。

その後、「瀛海縱談」という新コラムが『清議報』に掲載され、蔡鍔はその主筆を担当し、一連の文章を発表した。その中の一篇「不変亦變」では、「昔から各国の変法自強はみな国民から始まったのである。国民に変わろうとする志がなければ、国家の自強は実現し難い。有力な政府があつてもできない。今日中国の主権が失われたのは清政府のせいというより、我が國の国民が奮闘しなかつたためである」と述べ、さらに、中国人の「愛国心」が少ないので中国が2千年来一統の世で、国と民は全て君主の私物であり、自らが国民であることを自覚していなかつたためで、従つて愛国心が他国より少ないので当然であるとし、競争の激しい世界では、国の勝敗は直接に国民に関わり、その刺激を受けければ、中国国民の愛国心は自然と沸き起こるだろうと分析した³⁶。では、どのようにしてより早く中国の国民に刺激を与えるのかということについて、蔡鍔はさらに「小説之勢力」、「新聞力之強弱与國家文野之關係」、「与亡国同道」などの文章を発表し、新聞や小説、訳書などが知識や情報を伝播する役割を担うと強調している。

また、秦力山は『清議報』の「甦夢錄」というコラムの主筆を担当し、いくつかの文章を発表した³⁷。その中の「支那豚」では、当時の列強を鷹、虎、狼などの猛獸に喩え、中国を彼らに囲まれた「豚」、4億の中国人を「豚の寄生虫」に喩え、もし豚が食べられたら、寄生虫も生きていけないと述べ、ワシントン、ナポレオン、ガリバルディらもかつては豚の寄生虫の一人であったが、中国人も彼らのようになってほしいと述べている³⁸。つまり、秦はすでに国家と国民との重要な関係に気づき、もし中国が滅亡すれば、中国人も生きていけないことを説いたのである。

また、蔡・秦のいずれも当時の中国人の国民性に目を配っている。蔡鍔は「地大人衆不可恃也」、「奴性」などの文章において、中国人の「奴隸性」、特に当時清政府内部の官僚たちの「奴隸性」を批

判した。蔡はまた勤王蜂起で亡くなった傅良弼の言葉を引用し、当時の外国のメディアが中国人の国民性を低く評価するのは受け入れ難いが、中国人を覚醒させる箴言だと述べ、日本の朝日新聞に載った「支那人之特質」などの文章を訳し、『清議報』の71号から73号までに掲載した。秦力山は「説奴隸」を発表し、奴隸の種類、奴隸の性質、奴隸の根源に分けて分析し、奴隸と国民を区別しながら、中国で奴隸から国民に変わら人がたくさん現れるよう呼びかけた³⁹。このほかに、彼らの東京大同学校の同級生である鄭貫一が『清議報』に発表した「独立説」においても、国民が国家の盛衰存亡において果たした重要な役割を述べ、国民の独立の精神を養うことが重要であると述べている⁴⁰。

これらの言論から窺えるように、勤王蜂起後、再び日本に戻った秦力山、蔡鍔らは、その思想上に大きな変化が生じていた。彼らは、中国不振の原因は腐敗した清政府だけでなく、その根本的な原因は国民にあると考えた。また、当時中国国民の奴隸性に対する批判や、国民として重要な資質である愛国心、独立の精神といった問題にも注意を払うようになったのである。

2. 『訳書叢編』、『開智録』、『国民報』に見る留学生の言論

表に示した通り、留学生たちは1900年の年末になって雑誌の創刊を進め、1901年までに彼らによって創刊された雑誌には『訳書叢編』、『開智録』、『国民報』の三つがあった。これらの雑誌に共通する特徴は、勤王蜂起後再び日本に戻った留学生、及び東京大同学校の学生が創刊・編集したということである。

まず、『訳書叢編』は中国人日本留学生が創刊した最初の雑誌と言われている。その主な内容は、18、19世紀の欧米、及び日本の社会政治学関連の論説を翻訳することを中心とし、西洋諸国の著

書もほとんどが日本語からの重訳であった。訳書叢編社は『訳書叢編』を発行するとともに、そこに載った政治・法律・経済・歴史・地理学関連の翻訳記事を編集して、多くの単行本を刊行した。しかし、梁啓超が『訳書叢編』は「文明思想を輸入し、我が國の一筋の光明となったが、惜しいことに、出版形式は叢書であって、新聞とは言えない」⁴¹と評価したように、その内容は西洋と日本の著作の翻訳を中心としたため、それによってこの時期の留学生の思想的特徴を考察するのは困難である。

この後まもなくして創刊されたのが『開智録』である。『開智録』は留学生組織である開智会の機関誌で、東京大同学校の学生、鄭貫一、馮自由、馮斯奕によって創刊され、『開智会録』ともいう⁴²。その主旨は「言論の自由、民権の独立を唱え、上、中、下層民衆の智慧を開き、中国の伝統文化と日本、西洋の文化から中国の打開策を探る」ことであった。蔡鍔がその序を書き、そこには「中国の亡国は国民の智が開かないことからきたのである……国民は一分の智があれば、一分の権利がもらえる。民智が開かれなければ権利を与えられても、守れない……一言でいえば、中国の亡国は、今日の政府によるものではなく、国民によるものである」⁴³と述べられている。

また、鄭貫一は「国民不可缺之性質」において、梁啓超が以前演説で言及した国民として持つべき24種の資質を取り上げた。この24種の資質は互いに相反し矛盾しながら成り立つもので、国民として欠かせないものであると梁は述べた。当時これを聞いた鄭は梁がなぜ学者を強調せずに国民を強調したのかが納得できなかったが、「國家は国民からなっている。国民がいなければ国家は成り立ちうるか。国民がいない国家を見たことがあるか。学者は国民の一部に過ぎない」⁴⁴と述べているように、すでに国民の重要性を認識していた。鄭が引用したのは、梁が1898年冬に東京大同学校

で行った講義であると考えられる。ここから、梁は1898年の段階である程度の国民意識を有し、その講義を聞いた学生たちにも印象を与えていたことが窺えるが、彼らのその後の言動を見るに、それらはよく理解されていなかったといえる。梁は当時の学生の筆記を収集し、1901年6月に「十種徳性相反相成義」を作成し、国民として持つべき10種類の資質を『清議報』に発表した⁴⁵。また、馮自由の「論演説之源流及其与国民之関係」、「演説学之精神鍛錬」、鄭貫一の「論閱新聞紙之益」、「与論之世界」などの文章は、演説や新聞などのメディアが国民思想の広がりにおいて果たす重要な役割を論じ、それによって国民性を変えられることや、若い世代が国民として果たすべき責任などを論じた⁴⁶。ここでもう一つ興味を引くのは彼らの義和団に対する評価である。これまで留学生たちは列国や中国国内外の世論と同じように義和団を低く評価したが、「義和団」、「義和団有功於中国説」などの文章は初めて国民の視点から義和団を再評価し、義和団が国民としての独立の精神を示したことを見たことを評価すべきと主張した。

この後、1901年に秦力山らによって創刊されたのが『国民報』である。その発刊の主旨は「世界の公理を唱え、国民の精神を振起させる」⁴⁷ことであった。特に社説欄において、国家と国民に重点をおいた論説が掲げられた。その中の一篇「原國」は国家論を展開し、「秦漢唐宋元明というのはそれぞれ一家をいうに過ぎない。それは互いに争奪、殺戮を繰り返したが、これはすべて一家の私事であり、国民からすれば、王朝であるが、国ではない」⁴⁸と述べ、また「亡國篇」において、清朝は「一家の私号、一族の私名」⁴⁹に過ぎず、国ではないとした。では、なぜ当時の中国に国がないのかということについて、「説国民」は国家が成立するための不可欠の要件は国民であるとして、次のように述べた。

国は君主がなくて成り立つうか。成り立つことができる。民主国の總統（大統領）は君主とは言えない。それは、總統が民意に従つて去るか留まるかが決められるからである。國は民がなくて成り立つうか。成り立つことができない。民は税を納めて国家財政を支え、力を提供して国防に尽くす。民がなければ國は廃墟となり、世界に民がなければ世界は廃墟となる。故に國というものは、民の國であり、天下の國は天下の民の國である⁵⁰。

このように、彼らは国民が国家に対して果たす重要な役割を強調した。しかし、その一方で、現実の中国には眞の「国民」ではなく、奴隸だけであり、これを中国が弱くなった原因であると見なした。そこで、彼らは奴隸と国民とを区別する基準を作り出した。つまり、奴隸は無権利で、国に対する責任を持たず、圧制に甘んじ、尊卑の秩序を尊び、従属を好む属性を持つのに対して、国民は権利・責任を有し、自由・平等・独立を尊ぶ属性があるとした。こうして彼らは20世紀の中国の運命はこの眞の国民によって決まると強調する一方で、当時の中国では、下層の民衆は言うまでもなく、士農工商、官吏、留学生まで奴隸性を持っていると批判し、中国で眞の国民を創ろうとすれば、「国民の種を播くしかない」と説くのである。ここでいう「国民の種」とは、新聞雑誌や訳書、小説などを通じて、中国で「国民」意識を広めることを指していよう。

また、この時期の留学生たちの勤王蜂起に対する考え方からも彼らの思想的な変化を窺うことができる。勤王蜂起後日本に戻った秦力山ら留学生は、張之洞らによる鎮圧及び康有為が承諾した運動資金の支給延期のせいで、勤王蜂起が失敗したと考え再挙しようとしたが⁵¹、その後「中国滅亡論」において、当時勤王運動に参加したものたちと革命を行おうとするものたちについて、以下のよう

に述べている。

(彼らの) 性格は渦巻く水のようなものである。主旨は定まらず、朝には秦につき、暮には楚につくかのように叛服常ない。それは結局無教育、無思想からきている。功名を慕う者は他の天子は奉戴しないという思いを抱くようになり、功名を成す人と交われない者は捨身で危険を冒そうとする志を生じる。革命と勤王のいざれが良いかについて本当に討論できる連中ではない。しかも革命・勤王がどのようなことをするのかさえわからない人もいて、盲目的に勢いに従って、大騒ぎしてやまない⁵²。

このように、勤王蜂起後に日本に戻った留学生たちは蜂起失敗の原因を真剣に考えるようになったことが窺える。また同文では康有為ら保皇派がいつも口にした「君恩」、「友仇」にも大いなる疑問を投げかけ、彼らの責任は果たしてそこまでなのかと問うている。

さらに、「亡國篇」では、以下のようにも述べられ、ここから留学生たちがワシントンやナポレオンを自任することをやめ、一国民として「無名の英雄」になろうという志を立てたことが窺える。

フランス大革命が本当にナポレオン一人の功で、アメリカの独立がワシントン一人の功だと思うか……もしかつて剽悍なフランスの国民がいなければ、ナポレオンはどうなったか。もし十三州の自治がなければ、ワシントンはどうなったか……アメリカの独立はアメリカの自治、フランスの革命はフランスの国民の民気がそれを成功させたのである。私は敢えて今日の志士の才力がワシントン、ナポレオンに及ばないというわけではないが、今日の中国では、ナポレオン、ワシントンの才

力より百倍強い人がいても、何の役にも立たない⁵³。

以上から、勤王蜂起後に帰国した留学生たちの思想に大きな変化が生じたことが窺える。それは封建的な変革思想である「任俠」救国思想、つまり中国で少数の「任俠」の人士によって変革が実現できるという認識から解放され、中国全土の国民へと目を転じるようになったということである。近代国家を構築する際に国民全体が果たす重要な役割を知った彼らは、雑誌の創刊や訳書の出版などの活動を通じて、中国人日本留学生界だけでなく、広く清末の中国でも国民意識の普及に大きく貢献したのである。それは、後の革命活動へと続く思想的背景、社会的基盤を形成したということができよう。

V. おわりに

以上、本稿では、清末中国人日本留学生における「国民意識」の形成過程を明らかにすることを課題とし、とりわけ1901年までの留学生による「国民意識」形成に至る思想的軌跡について検討を加えた。そこから次のことが明らかになった。

まず、1900年前の中国人日本留学生界はバラバラな状態で、国のことのみならずお互いのことにはえ無関心であった。その転機となったのは、義和団の乱とその渦中に留学生たちが直接関わった勤王蜂起である。蜂起に参加したのは、当時留学生界の中で「熱心家」と呼ばれた戢翼翬、沈翔雲、呉祿貞ら官費留学生、及び戊戌政変後梁啓超を追って日本に来た時務学堂の学生であった。

次に、当時の中国人日本留学生界、特に先頭に立って勤王蜂起に参加した留学生たちの思想と行動に大きな影響を及ぼしていたのは梁啓超ら維新派が主張した「任俠」救国思想であった。日本に留学する前の時務学堂の学生は、梁啓超らの維新派から「任俠」救国思想を受容し、日本に留学し

た後もその「任俠」救国思想の影響はいささかも減少しなかった。その思想は戢翼輩、沈翔雲、呉祿貞ら官費留学生にも浸透し、最後にその実践ともいえる勤王蜂起に参加するに至った。

さらに、勤王蜂起後彼らの思想上に大きな変化が生じた。勤王蜂起前、彼らは少数の「任俠」の人士がいれば中国の変革が成功できると信じていたが、勤王蜂起後再び日本に戻った後は、国民全体が近代国家を創るなかで果たす重要な役割に目を転じるようになった。それを悟った彼らは勤王蜂起に対する考え方を見直し、封建的変革思想である「任俠」救国思想と手を切り、自らを有名な「任俠」に擬することをやめて、中国の一人の「国民」として無名の英雄になろうと呼びかけた。このことから、この時点で彼らの国民意識がすでに形成されていたことがわかる。

このように、留学生たちの国民意識が形成されるにつれ、彼らは雑誌の創刊や訳書の出版などの活動に取り組み、中国人日本留学生界だけでなく、広く清末の中国に国民意識を普及させる上で貢献した。ある意味で彼らは、多くの人々を近代国民として覚醒させることにおいて、梁啓超が創刊した『清議報』や『新民叢報』に勝るとも劣らないほどの役割を果たしたといえる。その後の革命運動の展開は、必ずしも孫中山、同盟会のような少数のエリート集団だけによるものではなく、むしろ、それを支えた近代国民意識の覚醒、近代ナショナリズムの誕生、発展という社会的基盤がそこにあったことを決して忘れてはならないだろう。

[注]

(1)中国の近代国民形成に関して、日本では、新島淳良「中国における『近代化』——国民意識の形成と伝統」(『社会科学討究』第11巻2号、1966年2月)、村田雄二郎「近代中国における『国民』の誕生」(国分良成ほか編『グローバル化した中国はどうなるか』新書館、2000年)な

どが挙げられる。一方、中国では、中華人民共和国建国以後の30年間、国民意識に関する研究はほとんどなく、近年ようやく注目されるようになった。何新『論中国歴史与国民意識——何新史学論著選集』(時事出版社、2002年)、余偉民・劉昶主編『文化和教育視野中的国民意識——歴史演進与國際比較』(上海辞書出版社、2012年)が挙げられる。これらの研究はいずれも辛亥革命以後に焦点をあてた研究である。

(2)筆者は清末中国における革命思想と運動の底流を支える近代国家・国民意識の形成過程の全容の解明に努めたいという問題意識にたち、これまで国民意識の普及に尽力した梁啓超や、中国人日本留学生界で最初に「軍国民」を唱えた蔡鍔について考察を重ねてきた。具体的には、拙稿「梁啓超の近代国民思想の形成——『任俠』から『新民』へ」(『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』42号、2016年11月)、同「清末、中国人日本留学生における国民意識の形成——蔡鍔の『軍国民』主張について」(『文化共生学研究』16号、2017年3月)を参照されたい。

(3)例えば、厳安生『日本留学精神史——近代中国知識人の軌跡』(岩波書店、1991年)、吉澤誠一郎『愛国主義の創成——ナショナリズムから近代中国をみる』(岩波書店、2003年)などが挙げられる。

(4)阿部洋『中国の近代教育と明治日本』(福村出版、1990年), 57, 70頁。また陳瓊瑩『清季留学政策初探』(文史哲出版社、1989年), 82–83頁。

(5)上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』第2巻上(上海人民出版社、1979年)。また史和ほか編『中国近代報刊名録』(福建人民出版社、1991年)を基に作成。

(6)「会館大事記」(『清国留学生会館第一次報告』清国留学生会館、1902年), 19頁。

(7)実藤恵秀『中国留学生史談』(第一書房、1980年), 137頁。

(12)

- (8) 「留学生会館之起源」、前掲『清国留学生会館第一次報告』、1-2頁。
- (9) 従来の研究では、庚子の勤王蜂起より義和団運動の方が注目されてきた。しかし、義和団運動は結局民衆の自発的運動であるのに対し、勤王蜂起は当時の中国の各改革勢力が中国で民主政治を行おうとした努力の結果であり、その意義は義和団運動より遥かに勝っているとも言われる（桑兵『庚子勤王与晚清政局』北京大学出版社、2004年、7頁）。また『清議報』は、当時の義和団の行動及びそれに対する列国の反応を毎日のように報道した。それらは、当時の中国人日本留学生界と華僑界が中国国内の状況を知る重要な情報源となった。
- (10) 「励志会与訳書彙編」（馮自由『革命逸史』初集復刻版、中華書局、1981年）、98-99頁。
- (11) 島田虔次『隠者の尊重——中国の歴史哲学』（筑摩書房、1997年）、219頁。
- (12) 鄭海麟『黃遵憲与近代中国』（生活・読書・新知三聯書店、1988年）、198頁。
- (13) 黃遵憲『日本国志』（上海古籍出版社、2001年）、25、49頁。
- (14) 劉保剛「試論近代中国的俠義精神」（『鄭州大学学報（哲学社会科学版）』2013年第2期）。
- (15) 梁啓超「日本国志後序」『時務報』第21号、1897年3月23日。ほかに、麦孟華「尊俠篇」『時務報』第32号、1897年7月10日などが挙げられる。
- (16) 「任俠」を唱える代表的な論説としては、『知新報』に掲載された「説任俠」、「俠会章程」、「尊任俠」、康同薇「論中国之衰由於士氣不振」、『湘學報』の28号から35号にかけて連載された「日本国志」、『湘報』に掲載された唐才常「論熱力」、同「辨惑」、樊錐「開誠篇」、同「上陳中丞書」などが挙げられる。
- (17) 湖南時務学堂の教授法や、東京大同学校で用いられた教材などについては、前掲拙稿「清末、中国人日本留学生における国民意識の形成——蔡鍔の『軍國民』主張について」で論じたが、ここでは新史料を加え、特に日本留学前の時務学堂の学生たちが梁啓超ら維新派から受容した「任俠」思想の実像、及び梁啓超や東京大同学校の留学生とほかの学校の留学生との関係などを焦点にして論じた。
- (18) 「湖南開辦時務学堂大概章程」『湘學報』第25号、1897年12月14日。
- (19) 梁啓超著、夏曉虹輯『飲冰室合集集外文』（北京大学出版社、2005年）上、24-30頁。
- (20) 唐才質「湖南時務学堂略志」（中国政治協商會議湖南省委員会文史資料研究委員会編『湖南文史資料選輯』第1集、第2輯、湖南人民出版社、1981年）、54-55頁。
- (21) 丁文江・趙豐田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第1巻（岩波書店、2004年）、151-152頁。
- (22) 梁啓超を始め、韓文拳、葉覺邁も守旧派に批判された。「湖南時務学堂課芸總教習梁啓超批」（蘇輿編『翼教叢編』第5巻、（出版社不明、1898年）、6-10頁）。
- (23) 曹沫は春秋時代の魯国人。莊公13年（紀元前681年）に魯の莊公が齊の桓公と柯（現山東省陽谷県東）で会合した時、曹沫は剣を持って桓公を脅迫して盟約を結ばせ、魯の失地を取り戻したと伝えられている。（『刺客列伝』、司馬遷撰『史記』第8冊卷86、中華書局、2013年、3037-3038頁）。このように、単身で大国の齊から土地を取り戻した曹沫の勇力をもって蔡鍔は「心俠」と称したのであろう。
- (24) 40歳にして、どんな場合にも心が動搖しない、それは眞の勇氣いわゆる浩然の気を持っているからである、とされる孟子は、蔡鍔が強調する「氣俠」であろう。（『孟子』公孫丑上、阮元校勘『十三經注疏』第8巻、芸文印書館、2007年、54-55頁）を参照。
- (25) 曾業英編『蔡松坡集』（上海人民出版社、1984年）、

- 9頁。
- (26) 蔡良寅（蔡鍔）「後漢書党錮伝後書」『湘報』第109号、1898年7月12日。
- (27) 黄頌鑾「讀史記遊俠伝書後」『湘報』第116号、1898年7月20日。
- (28) 前掲『梁啓超年譜長編』第1卷、309頁。
- (29) 「記東京大同学校及余更名自由経過」、前掲『革命逸史』第4卷、97頁。
- (30) 「東京高等大同学校」、前掲『革命逸史』初集、72-73頁。
- (31) 勤王蜂起に関しては、前掲注2の拙稿でも論じたが、ここでは新しい史料を加え、留学生の視点からもう一度捉え直したい。
- (32) 林邁之ほか編『自立会史料集』（岳麓書社、1983年）、36頁。
- (33) 前掲『自立会史料集』、16、30、46頁。
- (34) 菊池貴晴「唐才常の自立軍起義」（『歴史学研究』170号、1954年4月）、判沢純太「唐才常自立軍蜂起の政治過程——義和團事件から日露戦争に至る中国革命党の潮流」（『軍事史学』第16巻4号、1981年3月）、陳長年「庚子勤王運動的幾個問題」（『近代史研究』1994年7月第4期）。
- (35) 「護国之役回顧談」（1922年12月25日、南京学会全体公開講演、梁啓超『飲冰室合集』第5冊、『文集』39、中華書局、2011年）、88頁。
- (36) 「不变亦变」『清議報』第65号、1900年12月2日。
- (37) 蔡鍔は1900年11月から1901年3月まで衡南劫火仙というペンネームで『清議報』（64-73号）の「瀛海縱談」という新コラムの主筆を担当し、合わせて32篇の文章を発表した。秦力山は力山遜公というペンネームで1901年5月に同誌（78-80号）の「甦夢錄」という新コラムの主筆を担当し、合わせて8篇の文章を発表した。
- (38) 力山遜公（秦力山）「支那豚」『清議報』第78号、1901年5月9日。
- (39) 公奴隸力山（秦力山）「說奴隸」『清議報』第80号、1901年5月28日。
- (40) 自強（鄭貫一）「独立説」『清議報』第58号、1900年9月24日。
- (41) 任公（梁啓超）「本館第一百冊祝辭並論報館之責任及本館之経歷」『清議報』第100号、1901年12月21日。
- (42) 『開智録』に載った論説は、この時期の留学生たちの思想的変化と特徴を解明するために重要な資料であるが、国内外の図書館に所蔵がなかったため、長い間この雑誌を見るることはかなわなかった。やがて1980年代になると、この雑誌の1-6号が見出され、現在は復旦大学の図書館に所蔵されている。現在は、復旦大学出版社が出版した『中国文化研究集刊』第4輯（1-3号、1987年）、第5輯（4-6号、1987年）で見ることができる。ただし、従来の研究はなおこの資料を十分には用いていない。『開智録』の停刊期間は未詳であるが、馮自由は「十余号まで出版した」と述べ、梁啓超は「十号に満たない」と述べている。『訳書彙編』第7号（1901年7月30日）まで『開智録』の広告が掲載されたことから、『開智録』は少なくとも1901年7月までは発行されていたと考えられ、もし毎号遅滞なく発行されていたならば、10号以上に達していたと推測できる。
- (43) 奉翻生（蔡鍔）「開智会序」『開智録』第1号、1900年12月21日。
- (44) 貫庵（鄭貫一）「国民不可缺之性質」『開智録』第3号、1901年1月20日。その24種の資質の性質は大きく3種類に分けられる。一つ目は、国家に関するもので、その内容は競争と和親、独立と合群、自由と服従、破壊と成立である。二つ目は、体貌（容姿）に関するもので、冒險と忍耐、自信と虚心、希望と素位（現状の認識）、割断（断絶）と愛恋（熱愛）である。三つ目は、靈魂（人格）に関するもので、求楽と刻苦、喜事と主静（無為）、虚想（仮説）と実験、率性（本性に従う）と変化である。

④5)任公（梁啓超）「十種德性相反相成義」『清議報』

第81号、1901年6月7日。梁啓超はその冒頭において、次のように述べている。「これは己亥（1899年）冬に私が東京高等大同学校にいた時の講義である。当時定稿にしておらず、その後すぐに忘れてしまっていたが、最近公理の学が次第に盛んになったものの、国民思想の潮流はかなり異なる範疇であるため、同学諸君の筆記したのを取り、それをまとめ加筆修正し、新聞に載せて当世の教育家の参考に供することにした」。

④6)ほかにも例えば、「吾人之責任」、「国民之特性可改造」、「真少年」、「老大國少年民」などの文章が挙げられる。

④7)「国民報告白」『清議報』第76号、1901年4月19日。

④8)「原國」『國民報』第1号、1901年5月10日。

④9)「亡國篇」『國民報』第4号、1901年8月10日。

⑤0)「說國民」『國民報』第2号、1901年6月10日。

⑤1)例えば、秦力山は勤王蜂起が失敗した後、再举を謀ろうとシンガポールにいる康有為と邱叔園を訪ねたが、蜂起失敗の原因が康有為による「擁資自肥（資金の着服）」にあったと考え、康有為に絶交状を叩き付けて日本に戻ったという。

前掲『革命逸史』初集、87-88頁。

⑤2)「中國滅亡論」『國民報』第2号、第3号、1901年6月10日、7月10日。

⑤3)「亡國篇」『國民報』第4号、1901年8月10日。